

「名前のない星」批評賞を終えて、講評とともに

「名前のない星」代表 叶風生

2024年8月16日～25日まで、円頓寺レピリエにて行われた『殺意(ストリップショウ)』の批評賞は合計5作品の応募に終わった。

予想していたよりも応募数が少なく、正直、落胆を禁じ得なかった。

公募ガイドをはじめ各種メディアへの掲載、賞金の付与など、企画として注目度を上げる要素をできるだけ追加した。

結果として注目度(閲覧数)は全国規模であったと自負しているのだが、応募作(総数)には跳ね返ってこなかった。

インターネット配信での観劇を可とした全国区で展開する批評賞は今までにない、まったく新しい構想だった。

それ自体は悪くない企画だと思っているし、それなりに評価してくれる人もいた。それゆえに結果につながらなかったことが悔やまれる。

SNS等に誰でも好き勝手感想を投稿できるようになり、「批評」はまったく姿を変えてしまった。

そもそも日本にはまともな「批評家」がいないというのは欧米の評価だ。そこは僕も同意するところである。

でも、そもそも批評家はメディアに必要なのだろうか。

新聞やマスコミが「権力の監視」であるように、批評家はそのメディアの「質の保障」を担保する存在なのだろうか。

一理あるとは思いますが全てではないと思う。

その理由は、演劇において日本と西洋ではまったく成り立ちが違うからだ。社会的な位置づけが異なるのだから、そこにおける「批評家」の役割も当然違ってくるはずだ。

アマゾンのレビューを開くと、好き勝手書かれた文が飛び込んでくる。

まさに玉石混濁なのだが、ひとつ言える真実は盛り上がっているモノは必ずレビューも増えるということ(こき下ろしたものが)。

だからもっと批評(感想)を書くようにしていきたいという思いがあったのがひとつ。

そして、演劇をやる側と観る側の橋渡しをもっとしたいという思いがひとつ。

演劇にある冷笑文化をどうにかしたいと思っているのがひとつ。

などなど、書き出せばキリがないのだが、斜陽産業である「演劇」を少しでも盛り上げるために興した企画であることは間違いない。

<失敗と思われる要因>

- 1 そもそも批評賞に興味がない。興味をもっている絶対数が少ない。
これは企画を立ち上げたときにも言われたことである。
- 2 批評対象とした作品が難しすぎる。
これは反省すべき部分ではあるが、このくらい骨太作品で批評を書けなきゃダメだ

とも思っている。

3 批評という言葉がよくない

批評は堅苦しいので「感想賞」にしようかと思ったが、やはり批評精神を育てるべきだと思い批評賞にしたのだが、結果としては敷居を高くしてしまったのかもしれない。

<よかったと思える部分>

応募が愛知県以外からあったことは企画の意義としては大きい。滋賀県、京都府、東京都という三都市から応募があったことで批評賞をやった意味があったと思う。

このような無名の俳優が出演する公演をいくら youtube で無料配信したところで、たいして誰も観てはくれない。

「全国区で展開する演劇の批評賞にはやってみる価値はある」と風呂敷を大きく広げてスタートしたが、応募総数5作品は、果たしてどのくらいの「価値」なのだろうか。

やってみなければ何事もわからないので、やってみてよかったと思っているが、こういった批評賞を継続して続けていけるのかということ、またそれは難しい問題になる。

以下、各作品の講評になります。

敬称略、順不同です。

① 『名前のない星』批評賞 応募論文 森 晃

熱意ある作品である。分量もとびぬけて多い。

ただ、のっけから「論文」とあり、「批評」もしくは「感想」を募集している賞の趣旨から外れてしまっている。

こういった熱意あるものに触れると「批評」とは何かを考えざるをえない。

論旨の展開自体に大きな問題もみられないが、ここに書かれているものが演劇を語っているのかということ、少し疑問を感じてしまうのだ。

それは演劇が戯曲ではなく上演されたものが作品であり、そこを語らなければ演劇の批評足りえないという僕の思いに繋がっている。

僕は森氏の論文はあくまでテキスト比較であり、そこに演劇として「上演された作品」であることが抜け落ちてしまっていると感じる。

これは僕自身がこの作品の脚色・演出をしているからに他ならない。

熱意は伝わったが、自分自身がこの作品を見て「どう感じた」かがもっと欲しかったです。

② 『妻に聞いてもらえない批評』 花房 勇人

この作品がもっとも上演作品を語っていると僕は感じた。

ただ、全体としての完成度から選に漏れることになってしまった。

この作者は知識的な素養は十分に兼ね備えていることは文の端々から感じる事ができた。

もっとひとつひとつの事象を掘り下げてくれたのなら、受賞していただろうと思われる。

掘り下げが出来る実力は持っている方だと思われる。

③ 『社会生活』 吉沢 垂氷

全会一致で受賞が決まった作品である。

この作品を「大賞」におくかが議論の争点になった。

「大賞」におけば他の作品に「優秀賞」を与えざるを得ない。

賞を与えること自体に問題はない。問題はこの批評賞のレベルをどこに置くかだった。

代表としての気持ちは「こんな賞に応募してきた人全員に賞をあげたい」とは思っていた。しかし、この作品が「大賞」にしてしまうと、そこで賞のレベルが決まってしまうのでは？ という意見もいただき、その意見を採用した形となった。

作品全体として可もなく不可もなく、きれいにまとめていると思う。ただひとつだけ言えば、もっと「自分の主観」を入れて欲しい。批評も作品である以上、「一般的な所見」と「自分の主観から観た」もののふたつの世界が交錯しなくてはいけないと思っている。

ここがクリアできていたら「大賞」になっていただろう。

④ つかめて、つかめていないもの 務川 智正

この作品を優秀賞に選出するかも少しだけ議論になった。

ただ、③と比べると作品の完成度が劣ることから賞にいたることがなかった。

劇世界から始まり、現代社会へとつなげていく論調も素晴らしいと思った。

ただやはり、三好十郎の『殺意』を語っているのであって、「名前のない星」プロジェクトの『殺意』を語っているわけではないと感じてしまう。

感想としてはとても完成度の高い文章だと思います。

⑤ 「名前のない星」プロジェクト第一回公演『殺意（ストリップショウ）』に対する批評文 松永 雄一

この作品も優秀賞に入れるかどうかをかなり議論したもののひとつであった。

結果として選に漏れたのは「視点が演技者のもの（自分がこれを演じたらという視点が強い）」と「作品の一部分の語りにとどまってしまっている」の二点が減点的要素として働いてしまった。

語り口や文章そのものはよくできている。「自分の主観」という部分に関しては、この作品が一番入っていたと思う。

以上

最後に、この度は「名前のない星」批評賞にご応募いただきまして、誠にありがとうございます。

応募していただいた皆様には心から感謝しております。

次の機会があるかはわかりませんが、違った形でも「批評賞」的なものを続けていければと思っています。

その時はまたご応募下さい。